



美術

沈滞のパリ・ビエンナーレ

国際展のシニセであるベネチア・ビエンナーレは、昨年も今年も開催中止となったが、ようやく来年、国別展示をやめ、「環境芸術」の総合テーマでひらかれることになった。カッセルの「ドクメンタ」展も、来年「新しい抽象」をテーマにひらかれるらしい。今年はパリ青年ビエンナーレが九月半ばから、サンパウロ・ビエンナーレが一〇月半ばからひらかれた。サンパウロ展が六〇年代末の流血騒ぎから、教訓を汲みとっていないのにたいして、前回から国別のコミッシヨナー制を廃し、国際委員会による作家選考制をとっている、パリ・ビエンナーレに注目があるのは当然だろう。

だが、國際的な前線の停滯を反映して、出品作品には新しい傾向も強い衝撃にもとはいひ。ハブニング・コンセプチュアル・アート、ビデオアート、写真や文字を使ったメッセージなど、いずれも二番煎じの感をまぬかれず、しかもできるだけ作爲の跡を消し去ろうとする傾向と、大仰な作爲の跡とが交錯している。強いてあげれば、スペインの反フランコ派作家の政治批判的な作品や、國際婦人年の反映か、一二人の出

品者中二五人の女性の進出が目立った程度。スイスの作家たちの「性の倒錯」を演ずるボデアートや、骨董じみたオブジェもかなりあって、全体にブルジョア社会のデカダンスを色濃く反映している。

日本からの参加は、会場入り口に
タタミ敷き、家具や本棚をそなえた
大きな部屋を設定した彦坂尚義、マ
リリン・モンローの顔を立体に、独
特なシステムで変形してゆくプロセ
スを示した柏原えつとむ、ビデオと
一〇個の小型レコードを使って、行
為と声を同時に伝達する野村仁、壁
を基盤状の線で小正方形に分割して
ナンバーをつけ、中央にグラッド・
ピアノをすえた田窪恭治、ビデオの
渡辺哲也、(前席和通は会場の条件と
折り合いがつかず不出品)など。

うに、ここでは先鋭で光っていた。もうひとつ、今回の特別展示は、「アンフォルメル」の画家ザ・ウィー・キーの帰国みやげといわれる、中国作家の文化革命、批林批孔をめぐる絵画だが、これが資本主義諸国の芸術の退廃と沈滞のなかで、意外に新鮮と受けとられたのは皮肉であった。